

目 次

I 調 査 概 要.....	1
II 調査対象地域図.....	3
III 凡 例 解 説.....	4
IV 植 生 調 査 表.....	43
V 資 料 リ ス ト.....	128
VI 調査担当者名簿.....	129

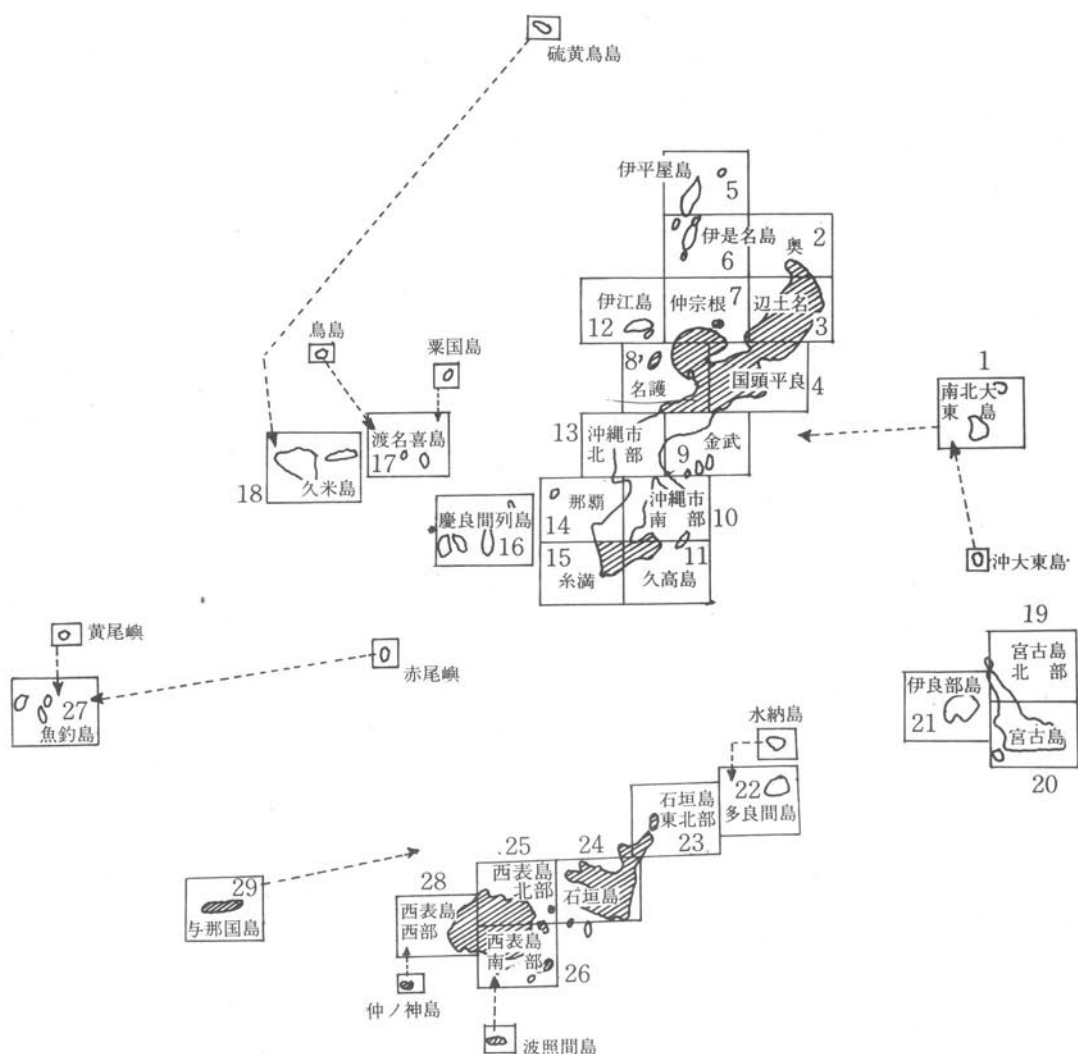
I 調查概要

1 調査地域の範囲

調査地域は次の調査対象地域図の斜線を入れた範囲で、沖縄県土の約半分を占め、国土地理院1/50,000の地形図の図幅名、奥、辺土名、国頭平良、仲宗根、名護、久高島、糸満、石垣島北部、石垣島、西表島北部、西表島南部、西表島西部、与那国島の13の図幅である。

地域としては沖縄島、石垣島、西表島、与那国島の4島であるが、沖縄本島は沖縄海岸国定公園と戦跡国定公園のある沖縄島の北半分と南部の一部である。他の3島はほぼ全域が調査対象地域である。

離島の多い沖縄県ではあるが、大きい島は今回の調査対象地域に含まれている事になる。



植生調査対象地域図（斜線の部）（沖縄県）

2 調査の実施方法

現存植生図の作製

第2回自然環境保全基礎調査要項の植生図作成上の指針に従い、最近（沖縄島は昭和52年3月30日発行、石垣島、西表島、与那国島は昭和49年9月30日発行）の国土地理院発行の $\frac{1}{50,000}$ の地形図を基本図に使用し、精度は $2\text{mm} \times 2\text{mm}$ を越える大きさを有する植物群落は可能な限り植生図上に表示する様努めた。

図示の方法は、要領に示された植生凡例一覧表の中から、これまでに調査されている資料を参考にして、今回の調査対象地域に該当するものを選び、沖縄県現存植生図凡例とし、さらに調査の結果追加すべきと考えられる群落については新しく一覧表を参考にして凡例を作り、最終的な凡例とした。使用した最終的な凡例は44例である。使用した各凡例には植生調査表を掲載するように努めた。

実際に植生図作製に当っては、可能な限り現地を踏査するように努め、既知の植生図やカラー空中写真も参考にして、最終的な現存植生図とした。

現 地 調 査

植生図作製にあたっては可能な限り、現地を踏査し、植生調査を実施し、図化するように努めた。

現地での植生調査は、要綱に示されている記入上の注意に従い、各調査地毎に階層の分化を理解し、各階層毎に出現する全植物（シダ植物以上）について Braun-Blanquet 法による優占度・群度を測定した。使用した階級は次の様である。

優 占 度

- r ……ごくまれに出現。
- +
- + ……少数で被度は非常に低い。
- 1 ……多数だが被度は低い。あるいはかなり少数だが被度はやや高い。
- 2 ……非常に多数（ただし被度 $\frac{1}{10}$ 以下）あるいは被度が $\frac{1}{10} \sim \frac{1}{4}$ （ただし個体数は任意）
- 3 ……被度が $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{2}$ で個体数は任意。
- 4 ……被度が $\frac{1}{2} \sim \frac{3}{4}$ で個体数は任意。
- 5 ……被度が $\frac{3}{4}$ 以上で個体数は任意。

群 度

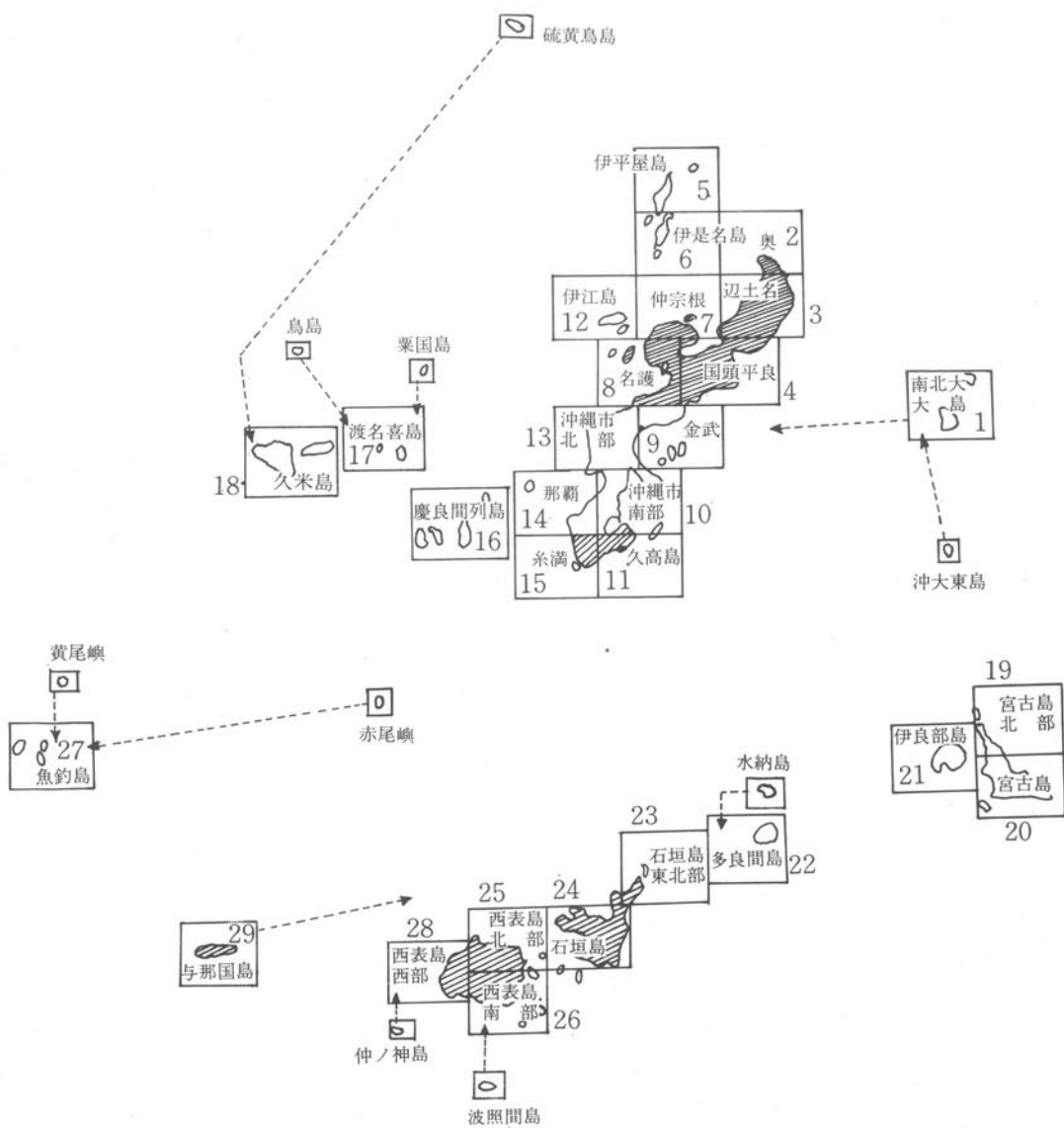
- 1 ……単生する。
- 2 ……群状または叢状に生育する。
- 3 ……斑状に生育する（小班あるいはクッション）。
- 4 ……小さいコロニーをつくって生育するか、あるいはまた大斑かじゅうたんを形成する。
- 5 ……大群をなす。

また各階層の樹高、植被率も併せて記録し、調査地の植生断面図についても現地で可能な限り図示する様努めた。調査地の立地については現地で記録する事が可能な海拔、傾斜方位、傾斜角度、母岩、土壌、風当りの状態、日当りの状態などを記録した。

II 調査対象地域図

植生調査の対象となった地域（植生図化された $\frac{1}{5}$ 万の地形図名）を示すため、地図番号図を作製し、調査対象地域図とした。

植生図化された $\frac{1}{5}$ 万 地形図の図葉は斜線 を入れて示してある。



III 凡 例 解 説

1 リュウキュウアオキースダシイ群集

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林, 亜高木林。

リュウキュウアオキースダシイ群集は山地性のシイ型の森林で, 粘板岩, 千枚岩, 国頭礫層などの風化した, 中性から酸性を示す赤褐色土壌を母材とした地域の, やや乾燥した山地斜面に発達する群落である。

構成種の主なものは高木層ではスダシイが優占し, 其の他イスノキ, ヒメユズリハ, イジュ, エゴノキ, ヤマモモ, タブノキ, クロバイなどが高頻度で出現する。

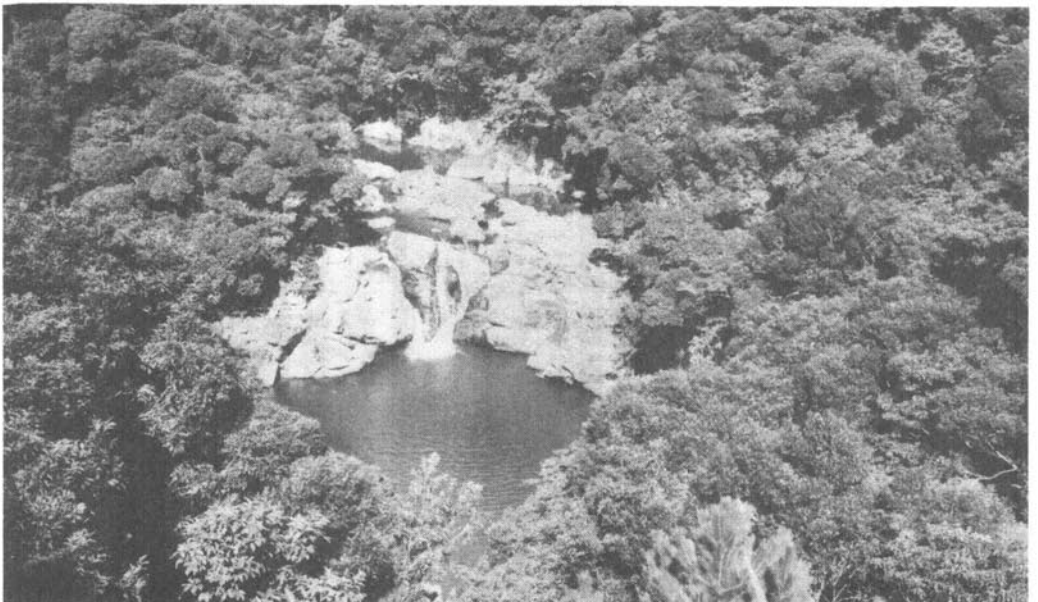
亜高木層ではタイミンタチバナ, コバンモチ, モッコク, ツゲモチ, アデク, シバニッケイ, フカノキ, カクレミノ, シロミズ, サクラツツジ, ナンバンアワブキ, ヒサカキサザンカ, ヒサカキ, ムッチャガラ, ヤマビワ, ヤブツバキなど多くの種類が見られる。

低木層にはリュウキュウチク, シマミサオノキ, シシアクチ, マンリョウ, ヤマヒハツ, ハクサンボク, クチナシ, モクレイシ, リュウキュウアオキ, オキナワアリドウシなどが見られ, 草本層ではタシロスゲ, ササクサ, エダウチホングウシダ, ユウコクラン, リュウキュウマメズタ, オニヘゴ, トクサラン, センリョウ, スジヒトツバ, アオノクマタケランなどの草本やシダ植物が出現している。

沖縄県内では沖縄本島の北部, 国頭地域の山地斜面や, 脊稜山系に続く海岸段丘などに分布し, 伊平屋, 伊是名諸島や慶良間列島, 久米島などもこの群集域と考えられる。現在山地農業の対象として開発が進んでいるのも, この群集域である。

森林が破壊され, 一度裸地化が進むと, 母岩は深部まで風化が進み, 土壌の溶脱現象が早いと見なされているため, 急速な開発に伴う裸地化は避けるべきである。

現在沖縄島とその周辺離島で最も広い面積に群落を形成している。



沖縄本島北部東側の海岸段丘上のリュウキュウアオキースダシイ群集



リュウキュウアオキースダシイ群集の樹冠部

2 ケハダルリミノキースダシイ群集

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林。

ケハダルリミノキースダシイ群集は沖縄島で最も高い与那覇岳(498.5m)を中心に、北の西銘岳、牛首岳、南の伊湯岳など、脊稜山系の山頂部で、土壌の深い、空中湿度の高い立地に成林する群集である。

高木層にはスダジイの他ウラジログシ、オキナワウラジログシ、イスノキ、ホルトノキ、エゴノキなどが出現し、亜高木層にはタイミンタチバナ、コバンモチ、モッコク、リュウキュウモチ、ヤマビワ、バリバリノキ、ニッケイ、ヤマモガシ、アオバナハイノキ、ヤブツバキ、ヒメサザンカ、リュウキュウナガエサカキ、アカミズキ、オオシイバモチなどが出現してくる。

低木層ではアマシバ、オオバルリミノキ、ケハダルリミノキ、アオバノキ、マメヒサカキ、リュウキュウコンテリギ、マルバルリミノキ、リュウキュウマユミ、シシアクチなど、草本層ではタシロスゲ、キノボリシダ、ナンカクラン、オオギミシダ、ノコギリシダ、タカサゴキジノオ、コウモリシダ、ヤンバルフモトシダなどが出現する。其の他、着生植物としてヒモラン、オキナワセッコク、シノブ、シコウラン、カシノキラン、マツバラン、クモランなども見られる。

この群集は沖縄島でも高い山頂部域に限られているので、これまで人為的攪乱など、一応開発からのぞかれてはいるが、林道の開通はこの群集域まで進み、伐採などの影響が見られる様になっている。他のシイ型の森林よりも土地の条件が限られているので、群集の分布域は小さく、今の様に林道の開発が進むと、それにつれて伐採などによる立地の変化がもたらされ、群集の成立場所は局限されてくる事も予想される。



与那覇岳山頂部のケハダルリミノキースダシイ群集

3 オキナワシキミースダシイ群集

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林。

オキナワシキミースダシイ群集は、沖縄本島の脊稜山系、特に与那覇岳を中心とした高い山地の尾根部で、土壌の深いやや平坦な、風通しの良い立地に成林する群集である。

群集標徴種としてオキナワシキミ、ヤンバルマユミ、ヤンバルフモトシダ、オナガエビネ、サクラツツジ、リュウキュウチク、サザンカ、オキナワヤブムラサキなどである。

群集の構成種は隣接するケナガエサカキースダシイ群集やリュウキュウアオキースダシイ群集との共通種が多い。それで高木層にはスダシイの優占度が高く、其の他イスノキ、ヒメユズリハ、エゴノキ、ヤマモモ、ミヤマシロバイが出現し、亜高木層にはコバンモチ、ヤマビワ、ヤマモガシ、バリバリノキ、ヤブツバキ、リュウキュウモチ、フカノキ、カクレミノ、ヒメユズリハ、アデクなどが出現する。低木層にはオキナワシキミ、オキナワイボタ、マルバルリミノキ、リュウキュウチク、サクラツツジ、サザンカ、ヤマヒハツ、オキナワアリドウシ、ミヤマシキミなどが出現し、草本層にはホザキカナワラビ、オナガエビネ、ヤンバルフモトシダ、オオギミシダなどが出現する。

現在林道の開発が進み、北部の山地も東側から西側へと横断のできる、幾つかの山道が開通し、しかも尾根部を縦走する様な林道も見られ、この群集域の山地も、かなり攪乱されるようになっていく。保全に対しての処方は沖縄北部山地の開発に対する総合的な位置づけの中で、沖縄県の林業や山地農業を島の生態系の中でどう位置づけるかを考える枠組の中で思考すべきであろう。

4 オキナワウラジロガシ群集

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林。

オキナワウラジロガシ群集は内陸側の谷部地形や、河岸への肩状部などに成林する。

沖縄本島や石垣島、西表島に広く発達しているが、斜面上部では沖縄本島ではリュウキュウアオキースダシイ群集、石垣島、西表島ではケナガエサカキースダシイ群集と接し、群集構成種の中に隣接する各群落の構成種が多く出現する。特に西表島では古見岳への斜面、仲間川の流域、浦内川の流域などに発達した林分を識別する事ができる。

西表島ではオキナワウラジロガシ、アオバノキ、ヒトツバコウモリシダなどにより識別され、高木層にはオキナワウラジロガシの他スダシイが高い頻度で出現する。その他フカノキ、ツルアダン、タブノキ、コバンモチなども出現する。

亜高木層ではアデク、フカノキ、モクタチバナ、スダシイ、ツルアダン、タブノキ、コバンモチ、エゴノキ、イスノキ、ハゼノキ、カクレミノ、ミミズバイなどの出現度が高い。

低木層にはリュウキュウアオキ、シシアクチ、シマミサオノキ、タシロルリミノキ、タイワンルリミノキ、マルバルリミノキ、アカハダノキ、ヤマヒハツなどが見られ、草本層ではヤエヤマノボタン、ツルアダン、トキワヤブハギ、トクサラン、リュウキュウテイカズラ、シラタマカズラ、マンリョウ、センリョウ、ササクサなどが見られる。



西表島浦内川上流のオキナワウラジロガシ群集

(着生しているのはツルアダンとシマオオタニワタリ)

5 ケナガエサカキースダシイ群集

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林, 亜高木林。

ケナガエサカキースダシイ群集は, 西表島の第三紀砂岩地域, 古生層の古見岳, 石垣島の花崗岩地域など, 両島の広い面積にわたって成林する。

群集標徴種はケナガエサカキ, ナカハラクロキ, セイシカ, ヤエヤマシキミ, シバニッケイ, オモロカンアオイなどである。

構成種の主なものは高木層でスダシイの他ソウザンハイノキ, ツルアダン, タブノキ, フカノキ, ヒメユズリハ, ホルトノキなどで, 亜高木層ではソウザンハイノキ, スダシイ, ツルアダン, コバンモチ, フカノキ, ヤエヤマシキミ, タイミンタチバナ, リュウキュウモクセイ, アカハダノキ, ケナガエサカキなど多くの樹種が出現する。

低木層の出現種も多くオニヘゴ, マルバルリミノキ, ソウザンハイノキ, シマミサオノキ, ヒサカキサザンカ, ツルアダン, コバンモチ, リュウキュウアオキ, シシアクチ, ヤマヒハツ, ヤエヤマヒサカキ, ギョクシンカなどが主に出現し, 草本層ではコバノカナワラビ, ツワブキ, ヤエヤマノボタン, ヒリュウシダ, ヨゴレイタチシダ, ササクサ, アオノクマタケラン, ツルアダン, オモロカンアオイなどが出現する。

沖縄県のシイ型の森林はリュウキュウアオキースダシイ群団として植物社会学的には位置づけられ, その下位単位として沖縄本島は先に記述した3群集が識別されているが, 石垣島, 西表島のシイ型の森林は, 沖縄本島やその周辺離島のシイ林とは異質のシイ林として識別され, 云わば, 我が国のヤブツバキクラス域で最も南のシイ林として識別されることになる。その為クラス標徴種であるヤブツバキやヒサカキなどの出現頻度が低い。しかし, ツルアダン, コニシハイノキ, セイシカ, アカハダノキ, ヤエヤマヒサカキ, タイワンオガタマノキ, ケナガエサカキ, トラノオホングウシダなど亜熱帯地域に共通の種類や, 熱帯性の種類などが多く出現してくる。

この森林も立地としては土壤流失の早い砂岩や頁岩の風化した土壤に成林している場合が多く, 裸地化などの開発に伴う攪乱は, さけるべきである。



1. スダシイ 2. ケナガエサカキ 3. ツルアダン
4. リュウキュウアオキ 5. ハルランイヌビワ 6. ホソバタブ



仲間川上流のケナガエサカキースダシイ群集

6 ヤワラケガキースダシイ群落

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林, 亜高木林。

与那国島の宇良部岳の南斜面や久部良岳から東側へ伸びた山系の南斜面や東斜面の一部に残り, 八重山夾炭層に属する砂岩や頁岩を母岩とした立地に成林している。

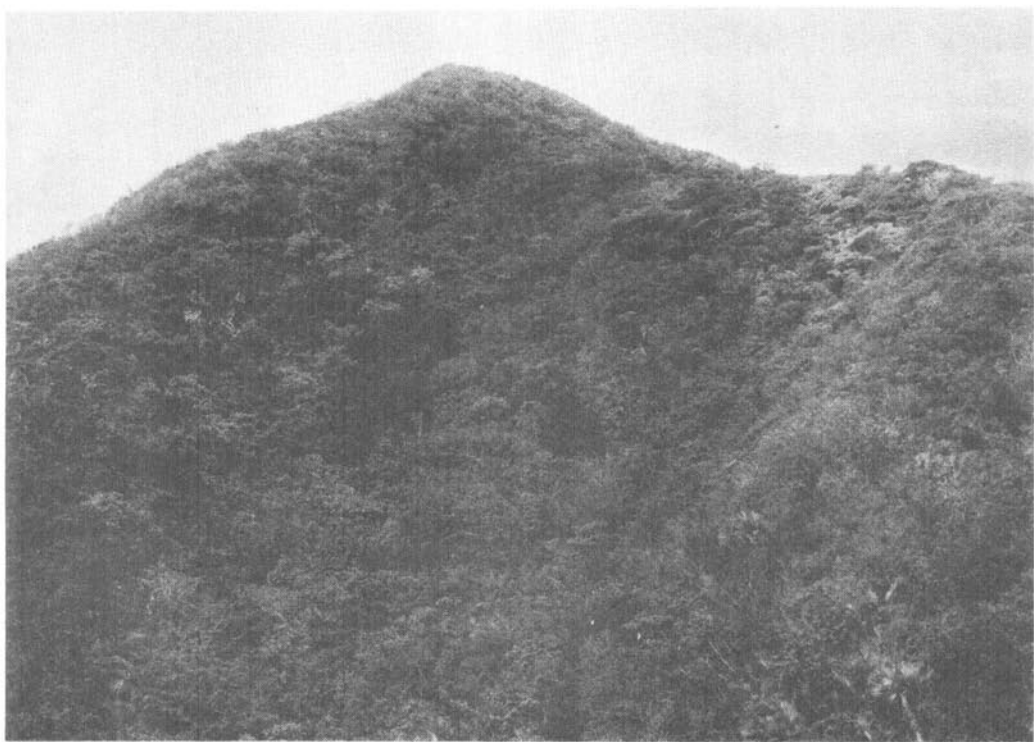
与那国島は周年潮風が強く, 場所により, 矮生化し亜高木層としての樹冠を示す事もある。

群落の構成種は高木層にスダシイの他タブノキ, タイワンオガタマノキ, ウラジロガシ, ハゼノキ, フクギなど, 亜高木層にはフクギ, モクタチバナ, フカノキ, ヒメユズリハ, シャリンバイ, コクテンギ, リュウキュウガキ, カクレミノなど, 低木層にはコミノクロツグ, リュウキュウアオキ, ヤワラケガキ, モクタチバナ, リュウキュウガキ, ヤブツバキ, アデク, ヤマヒハツ, マルヤマカンコノキ, クチナシなど, 草本層にはコバノカナワラビ, アオノクマタケラン, フクギ, ヨゴレイタチシダ, リュウキュウテイカカズラなどが出現する。

この群落はヤブツバキクラス域の最も南のシイ林であり, 構成種の中にフクギやヤワラケガキなど, より熱帯性の植物を含み, 石垣島, 西表島とは別のシイ林として識別される。

群落の占める面積は与那国島の一部に限られ, 開発を指向する島の中で, より保全の為に努力をする必要がある。

最近, 自然環境保全地域に一部指定されたが, 久部良岳に続く斜面はすぐ近くまで開発されているので, 特にその保全には注意が必要であろう。



ヤワラケガキースダシイ群落が成林する宇良部岳

7 アカテツ-ハマビワ群集

(相観), 亜熱帯常緑樹林の亜高木林, 低木林。(硬葉低木林)

アカテツ-ハマビワ群集は沖縄本島やその周辺離島などの母岸の露出した海崖とそれに続く斜面に海岸風衝林として識別される。

群集標徴種はハマビワ, ヤブニッケイ, トベラ, シャリンバイ (モッコクモドキ), アカテツ, ツワブキなどで奄美大島などでは, その下位単位としてサダソウ亜群集, シバニッケイ亜群集などが区分されている。

群落は風衝地のため樹高が低く, 一般に低木林として成林している事が多く, 樹冠を形成する種類としてアカテツ, ヤブニッケイ, ホルトノキ, モクタチバナ, ヒメユズリハ, ハマヒサカキ, トベラ, アコウ, モッコクモドキ, カンコノキの他リュウキュウマノスズクサ, ハカマカズラ, エビズル, ハマサルトリイバラ, テリハノブドウ, トウツルモドキなどのつる植物の出現頻度も高い。

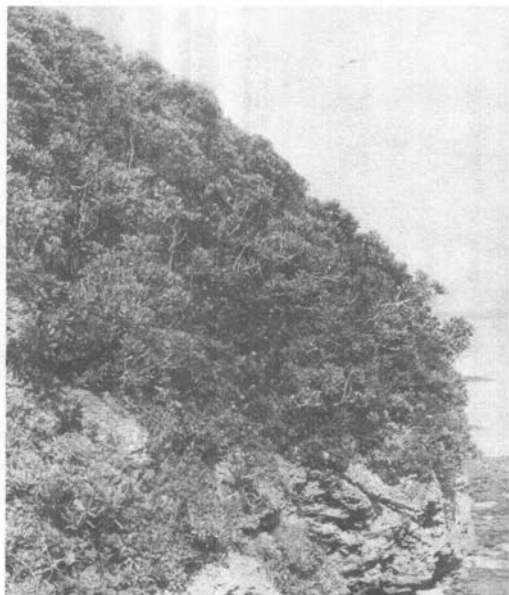
林床にはグミモドキ, クロツグ, ヤブニッケイ, モクタチバナ, アカテツ, ツゲモドキ, ソテツ, リュウキュウアオキ, ツルグミなどの木本その他シマオオタニワタリ, ナガバカニクサ, リュウキュウマメズタ, ツワブキ, ホウビカンジュ, オニヤブソテツ, コゴメズゲ, バケイスゲなどの草本の出現も見られる。

この群集の成立する場所は, 沖縄本島では北部の海に面した斜面であるが, 沖縄の道路は海岸沿いが多く, その為古くから道路用として削り取られ, 現在では一部に帯状に残っているだけである。しかも, その残っている地域も道路拡張のため失われているのが現状である。

沖縄の北部地域の海岸への斜面は, 地滑りや崩壊などの要因を, その水理地質面から多分に持ち合わせている。その保全のためにもこの風衝林の保護は重要な事であろう。



アカテツ-ハマビワ群集の立地



海崖に成林するアカテツ-ハマビワ群集
(沖縄島北部)

8 ソテツ群落

(相観), ソテツ形低木林, ソテツ群落は岩盤の露出した海崖や急峻な岩場などの立地に成立する群落で, 樹高も低く低木性の群落である。

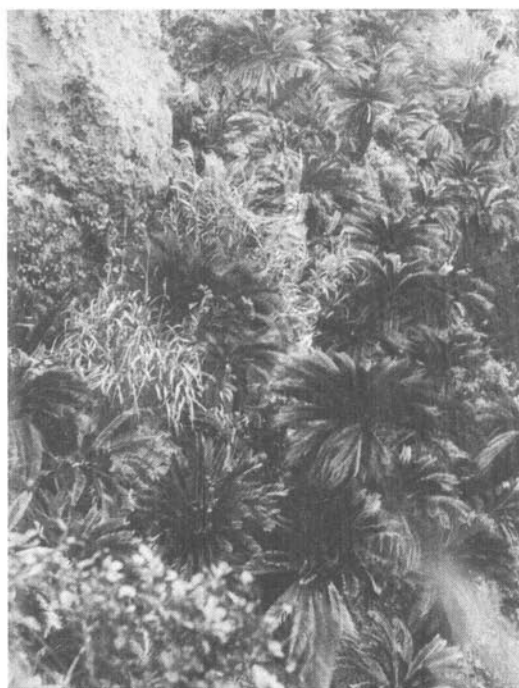
構成種は母岩の種類により幾分差も見られるが, 風衝地的要素の強い種類が多く出現する, 隆起サンゴ礁上に成立した群落の構成種をあげると低木層にはソテツ, ススキ, カラムシ, サルカケミカン, ゲッキツ, シماغワ, フクマンギ, ハマビワ, タイワンウオクサギ, グミモドキ, ガジュマル, モッコクモドキ, ヤブニツケイ, マサキ, アカテツ, トベラ, オオシマコバンノキなどの木本の他, ハカマカズラ, ノアサガオ, ヘクソカズラ, シイノキカズラ, カラスキバサンキライ, ハマサルトリイバラ, リュウキュウボタンズル, リュウキュウウマノスズクサなどのつる植物の出現頻度も高い。

林床にはタマシダ, ヒメクマヤナギ, コゴメスゲ, ツルソバ, ホシダ, グミモドキ, ゲットウ, サダソウ, サクララン, オキナワソケイ, ホウピカンジュ, ヤブラン, オオイタビなどが出現する。

県内では各島の海崖に一般に出現するが, 沖縄島では辺戸岳や本部半島, 島尻地方の断層崖や岩錐上などに多く, 周辺離島では伊江島の北海岸, 瀬底島の海崖, 栗国島や渡名喜島など小さい島には割に多く見られる。先島諸島では特に与那国島に多い。

ソテツはかつて食用や緑肥として重宝がられた事もあるが, 現在は観賞用として一部に栽培されているにすぎない。

しかし, ソテツの自生している所は他の植物が容易に生育できない厳しい立地の所であり, その点を理解し, 地形を変える事なく, 存続させる事も環境保全の一つ方法であろう。



海崖に発達しているソテツ群落



アダン群落に隣接して密生したソテツ群落

9 ビロウ群落・ヤエヤマヤシ群落

(相観), ヤシ状樹林の高木林, 亜高木林。

ビロウ群落は母岩に関係なく風衝性の立地に成林する。その為時には一つの島が全域ビロウに被われている事もあるが、現在では海崖や、島の主体部から突出した岬などの様な地形に残っている場合が多い。

今回与那国島で調査した組成から構成種を見ると高木層は樹高7~9m, 植被率約70%と高くビロウの優占度が高く相観的にはビロウの単一群落に見える。しかし林内に這入るとビロウの他ホソバムクイヌビワ, ハブカズラ, タブノキ, リュウキュウガキ, コクテンギ, アカハダグス, ショウベンノキ, ハマイヌビワ, フクギ, コニシイヌビワなどが出現し, 亜高木層との階層の分化が明らかでない。

低木層にはビロウ, リュウキュウガキ, アカテツ, フクギ, カクレミノ, マルヤマカンコノキ, フカノキ, ショウベンノキ, アカハダグス, コミノクロツグ, アワダン, シマヤマヒハツなど出現種が多い。

草本層にはホシダ, ホウビカンジュ, クワズイモ, リュウキュウテイカカズラ, オオイワヒトデ, カラスキバサンキライ, トウツルモドキ, アオノクマタケランなどが見られる。

沖縄県ではこの与那国島の他, 尖閣列島の魚釣島, 黄尾礁, 南・北大東島, 西表島の海崖, 尾根状風衝地, 伊平屋島の久場山などでよく発達した林分を見る事ができる。

ヤエヤマヤシ群落は西表島の仲間川中流域のウブンドルと星立御嶽, 石垣島の米原だけに見られる。八重山群島固有の群落である。高木層にはヤエヤマヤシが突出し, 樹高も12~15mと高く特有の相観を示している。

亜高木層にはヤエヤマヤシの他リュウキュウガキ, ハブカズラ, アワダン, オオバギ, フクギ, ハマイヌビワ, オオバイヌビワ, クロヨナ, ショウベンノキ, ホソバムクイヌビワ, フカノキ, モクタチバナ, アカメイヌビワなど低地林の構成種が高頻度で出現する。

低木層にはヤエヤマヤシとコミノクロツグが優占し, 其の他ハブカズラ, シマイズセンリョウ, オオイワガネ, ショウベンノキ, リュウキュウアオキなどが出現する。

草本層にはミカワリシダ, イシカグマ, ハブカズラ, カラスキバサンキライ, オオイワガネ, フウトウカズラ, トウツルモドキ, クワズイモ, ケホシダ, アリモリソウ, オオヘツカシダなどが出現する。

ヤエヤマヤシ群落は何れも国指定の天然記念物として保護されているが, 米原の指定地は観光地として利用され, 一部は踏圧による樹勢の衰えが懸念される。

ビロウ群落も大東島と伊平屋島は国と県の天然記念物の指定をうけ, 与那国島は自然環境保全地域の指定をうけている。



ビロウ群落の林内



仲間川ウブンドルのヤエヤマヤシ群落



傾斜の急な風衝地に成林したビロウ群落

10 ナガミボチョウジクスノハカエデ群落

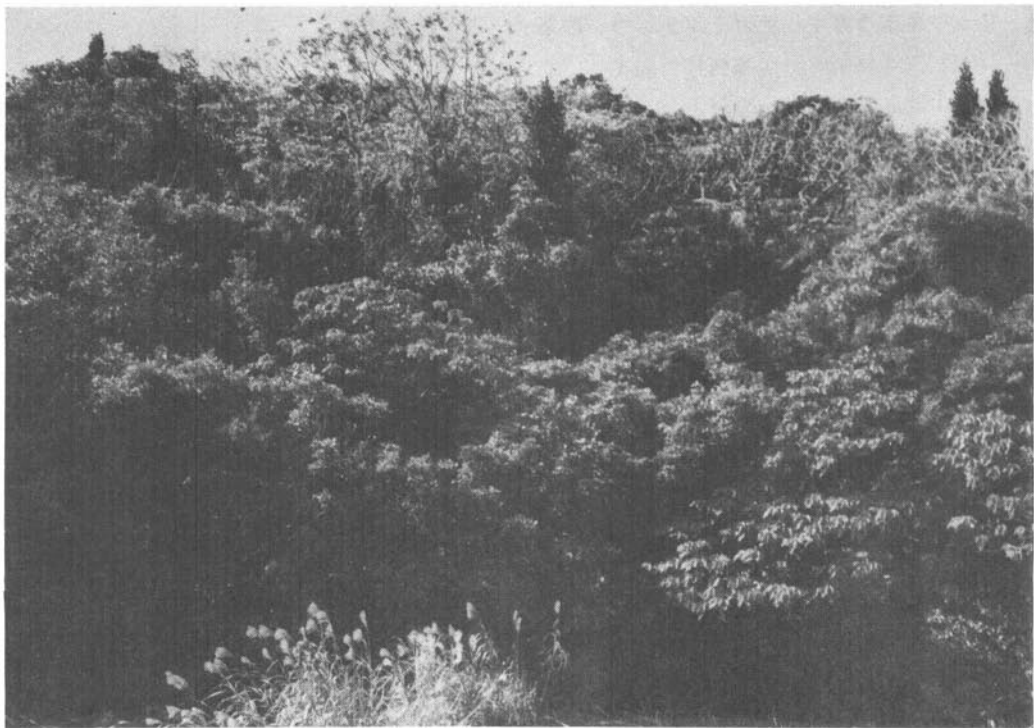
(相観)、亜熱帯常緑広葉樹林の高木林。

ナガミボチョウジクスノハカエデ群落は沖縄本島や周辺離島の主に石灰岩や泥灰岩などを母岩に持つ地域や、海岸線など潮風の影響を強く受ける立地に成立する群落である。

群落の構成種を見ると樹冠を形成する種類は多くヤブニッケイ、オオバギ、ハマイヌビワ、アカギ、クロヨナ、クスノハカエデ、ホルトノキ、ガジュマル、バクチノキ、クワノハエノキ、タブノキ、ムクイヌビワ、ハゼノキ、フカノキ、ツゲモドキ、カキバカンコノキ、キイルンカンコノキ、オキナワキョウチクトウ、リュウキュウハリギリなどが見られ、亜高木層ではリュウキュウガキ、モクタチバナ、ショウベンノキ、クスノハガシワ、アカテツ、シイクワシャー、リュウキュウモクセイ、シロダモ、シマグワ、ニガキ、ツゲモドキ、ホソバムクイヌビワ、サンゴジュ、タイワンウオクスギ、リュウキュウクロウメモドキ、コクテンギなどが出現する。

低木層にはナガミボチョウジ、クチナシ、クロツグ、シマヤマヒハツ、オオムラサキシキブ、グミモドキ、トベラ、ゲッキツ、ギョクシンカ、シマイズセンリョウ、イヌビワ、カキバカンコノキ、コウシュウウヤクなど、草本層にはクワズイモ、ノシラン、ホシダ、カラスキバサンキライ、ゲットウ、リュウキュウテイカカズラ、ホウピカンジュ、カラムシ、ナガバカニクサ、フウトウカズラ、アリモリソウ、トウツルモドキ、オキナワソケイ、ホラカグマなどが出現する。

この群落の成立する立地は、古くから耕作地や住宅地として人為との拘り合いが強く、現在では石灰岩の山地や低地では断層崖に沿う斜面や部落の御願所林として残っているにすぎない。県民が身近かに接する緑は大半が此の遷移系列に属する植生の緑と考えられる。育てる緑の指標として、残されている林分の保全には充分留意する必要がある。



ナガミボチョウジクスノハカエデ群落の樹冠（今帰仁村諸志御嶽）



同上林内の景観

11 リュウキュウガキナガミボチョウジ群落

(相観), 亜熱帯常緑広葉樹林の高木林。

八重山群島の石灰岩を母材とした地域や、潮風の影響を強く受ける斜面や低地に成立する群落で、沖縄本島などのナガミボチョウジクスノハカエデ群落に対応する群落と考えられる。

群落の構成種は高木層にタブノキ、オオバギ、クロヨナ、テリハボク、トウトルモドキ、オオバイヌビワ、シマトネリコ、カジノキ、イスノキ、オオクサボク、ヤンバルアカメガシワ、シマグワ、アカテツ、シロツブなどが出現する。

亜高木層にはショウベンノキ、リュウキュウガキ、クスノハガシワ、モクタチバナ、マルヤマカンコノキ、ゲッキツ、フクギ、オオイワガネ、ハマイヌビワなどが見られる。

低木層にはイヌビワ、シマヤマヒハツ、アカテツ、コミノクロツグ、ヤブニッケイ、クチナシ、アワダン、ホソバムクイヌビワ、ナガミボチョウジ、ツゲモドキ、グミモドキ、ゲッキツ、カギカズラなどが出現し、草本層にはトウトルモドキ、リュウキュウガキ、フクギ、ゲッキツ、ナガミボチョウジ、イシカグマ、カラムシ、ホウビカンジュ、カラスキバサンキライ、クワズイモ、ヤエヤマクマガイソウなどが出現する。

此の群落の成立する立地は主に低地のため、耕作地や牧場などの他、採石場など人為的攪乱を受けている事が多い。

与那国島では島の周辺低地部の石灰岩地がこの群落の潜在的な立地と考えられるが、現在牧場に利用されている所が多く、僅かに新川鼻に流れる河川の流域に残る石灰岩地の植生に此の林分の組成を見る事ができる。

西表島でも耕作地に利用されている所が多く、海岸沿いの低地や、上原部落から船浦部落へかけての隆起サンゴ礁地域や、東側の各部落の周辺にも此の群落の組成を持つ植生が発達している。石垣島では星野部落のマンゲ山に代表される群落であるが、東側の隆起サンゴ礁地域では断層崖などに沿って残されている。



与那国島のリュウキュウガキナガミボ
チョウジ群落の立地



ハビカズラがよじのぼり、樹冠にまで
達している。

12 マングローブ群落

(相観)、亜熱帯降雨林の亜高木林、低木林。

マングローブ林は河口の感潮域や内湾の最奥部など、マングローブ泥地といわれる泥湿地に成立する群落である。

構成種はメヒルギ、アカバナヒルギ、チャボオヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ハマザクロ (マヤブシギ)、ヒルギモドキ、ヒルギダマシの4科6種1変種である。

沖縄諸島はその内メヒルギ、アカバナヒルギ、チャボオヒルギ (沖縄本島のみ) ヤエヤマヒルギ、ヒルギモドキの5種で構成され、宮古群島はハマザクロとチャボオヒルギを除く5種、八重山群島はチャボオヒルギを除く6種で構成される。

低木性のメヒルギやヒルギダマシ、ヒルギモドキなどはマングローブ林の前縁や河道沿いに帯状に群落をつくり、高木性のアカバナヒルギはやや泥湿地の安定した後方で、大きな面積で群落を成立させている場合が多い。しかし、底質の陸化の状態や、河口域の状態などで、群落を形成する種の組み合わせは多様である。

その他林縁部や陸化が進むにつれて、シマシラキ、シイノキカズラ、ナンテンカズラなど陸域の植物の侵入が見られるようになる。

沖縄県で現在マングローブ林の見られるのは沖縄本島、久米島、南大東島、宮古島、伊良部島、与那国島を含む八重山群島である。

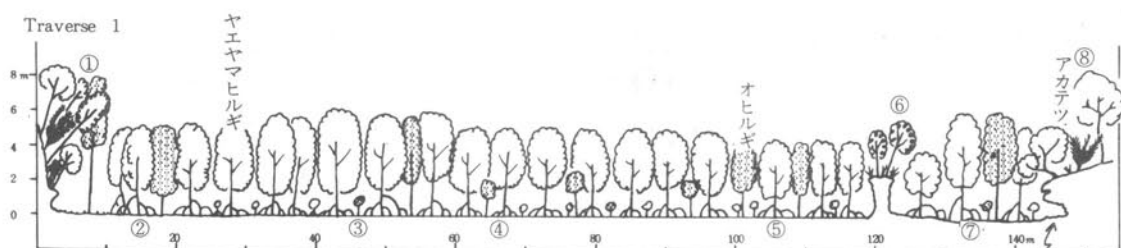
沖縄本島の慶佐次川、南大東島大池のアカバナヒルギ群落、石垣島の宮良川、西表島の浦内川、星立周辺、仲間川などは国と県の天然記念物として保護されている。特に八重山群島のマングローブ林内にはミミモチシダ、ニッパヤシ、ヒルギカズラなど植物地理学上貴重な種類が生育し、学術的にも価値が高く、その保全には充分留意する必要がある。



慶佐次川のマングローブ林



マングローブ林内 (ヤエヤマヒルギ)

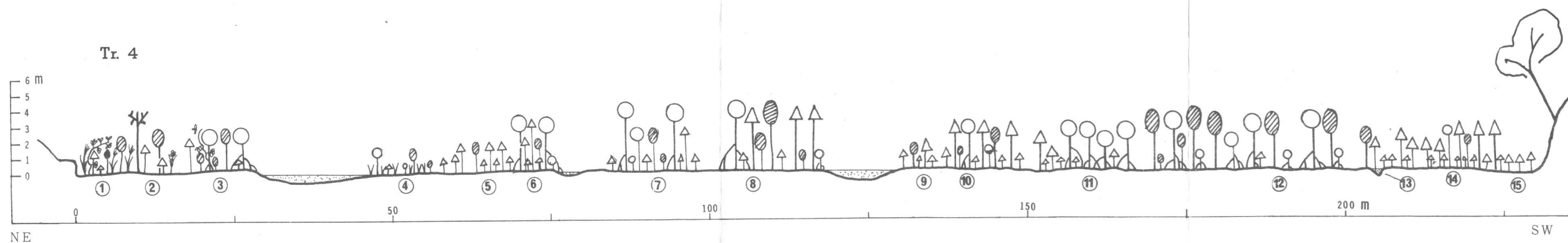


トラバース I の群落組成表

調査地番号 基点からの距離 (m)		① 0 2	② 10 37	③ 40 50	④ 60 70	⑤ 100 110	⑥ 120 122	⑦ 130 140	⑧ 145
相 観		リユウ ウキユウ	ガキ ヒルギ	ヤギ ヤマヒル	"	"	リンバイ ワシヤ	ヤギ ヤマヒル	アカテツ
高 さ (m)	亜高木層 (T ₂)		5	6	5	4.3		6	
	第一低木層 (S ₁)		1.5	1.2	2	/		/	
	第二低木層 (S ₂)		0.6	0.6	1	0.8		0.6	
植 被 率 (%)	亜高木層 (T ₂)		70	70	80	70		80	
	第一低木層 (S ₁)		10	15	10	/		/	
	第二低木層 (S ₂)		2	3	2	10		2	
Rhizophora stylosa ヤエヤマヒルギ			4・4 4・4 +	4・4 +	5・5 +	4・4		4・4 +	
Bruguiera gymnorhiza オヒルギ			1・2 +・2 +	+	+	3・3 +		2・2 +	

石垣島、吹通川のマングローブ林の植生断面模式図

(石垣島吹通川のマングローブ林 宮城他1977から引用)



凡 例



Tr. 4

調査区番号 基点からの距離(m)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
	0	5	16	47	57	69	76	105	130	135	158	165	203	214	226
	5	16	28	57	69	76	100	119	135	158	165	203	214	226	232
樹 高 (m)	S1	2.7	3.2			3.7	4.2	4.2		3.5	3.3	3.6	2.5	3.7	
	S2	1.3	1.8	1.4	1.4	1.8	1.9	2.5	1.1	2	2.3	1.7	1.5	2.0	1.1
	H	0.3	0.6	0.6	0.4	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.6	0.7	
植 被 率 (%)	S1	20	30			60	30	60		40	85	60	10	7	
	S2	75	40	50	10	85	30	60	10	95	30	10	10	70	5
	H	50	70	45	80	70	40	50	40	30	60	5	30	80	95
ヤエヤマヒルギ	S1	1.1	2.2			3.3	2.2	2.2		1.2	5.4	2.2		1.1	
	S2			1.2	+2	+2	2.2			+2	+	+2		+	+
	H	+	2.2	+2	+2	1.2	1.2	+2		+2	+	1.2		+	
メヒルギ	S1	1.2	+			1.2	1.1	3.3		2.3	+			+	3.3
	S2	3.3	3.3	1.2		5.4	1.2	2.2	+	5.5	2.2	1.2	+	4.4	1.1
	H	2.3	3.3	1.2	+2	3.3	3.3	3.3	3.3	2.3	3.3	1.2	+2	4.4	5.4
オヒルギ	S1	2.2	3.3				1.1	2.2		+2		3.3	1.2	1.1	
	S2	1.2	1.2	3.3	1.2	1	1.2	2.2	1.2	1.2	1.2		1.2	+2	+
	H	1.2	3.3	+2	2.1	1.2	2.2	1.2	1.2	1.2	+	1.2	+2	+	
ソナレシバ	H	+			4.4										
シノキカズラ	S1		+	+											
	S2	+													
	H					+									
イボクサギ	S2	+	+2	+											
ス ス キ	S2	1.2													
	H		+	+											
ハイキビ	S2	2.3													
オオアブラガヤ	S2	+													
	H		1.2												

慶佐次川のマングローブ林の植生断面模式図
(慶佐次湾のヒルギ林緊急調査報告 1976から引用)

13 ガジュマルークロヨナ群集（リュウキュウコクタン－フクギ群落）

（相観），亜熱帯常緑風衝林の亜高木林，低木林。

ガジュマルークロヨナ群落は八重山群島の海崖やその他の風衝地に成立する群落でリュウキュウコクタン－フクギ群落と同質である。

低地の風衝地ではガジュマル，アカテツ，クロヨナ，ツゲモドキ，ヤブニッケイなどが優占する事もあるが，其の他の立地ではイスノキ，フクギ，リュウキュウコクタン，ヒメユズリハ，ヤブツバキ，ツゲモドキ，ツルアダン，イヌマキ，モッコク，リュウキュウモクセイ，ヤブニッケイ，ホルトノキ，リュウキュウチク，トペラ，カクレミノ，モクタチバナ，シャリンバイなどが上層を形成し，林床にはリュウキュウガキ，センリョウ，アカテツ，シャリンバイ，ショウベンノキ，オオムラサキシキブ，カラスキバサンキライ，アマクサシダ，キジョランなどが見られる。

14 アカギ群落

（相観），亜熱帯常緑広葉樹林。

アカギ群落は河川流域の低地部や凹地形の所や谷部など，湿潤な立地に成林する群落である。

西表島での構成種を見ると，高木層にはアカギの他オオバギ，オオバイヌビワ，タブノキ，オオバアコウ，コニシイヌビワ，クロヨナ，ホソバタブ，フカノキ，アカメイヌビワ，ホルトノキなどが出現し，亜高木層にはリュウキュウガキ，モクタチバナ，フカノキ，フクギ，ナガバコバンモチ，タブノキ，オオバイヌビワ，ショウベンノキ，アワダン，ホソバタブ，リュウキュウモクセイ，アカメイヌビワ，ホソバムクイヌビワなどが出現する。

低木層にはシマヤマヒハツ，ナガミボチョウジ，アワダン，ハブカズラ，コミノクロツグ，モクタチバナ，ヤエヤマコンテリギ，タカサゴシラタマ，リュウキュウアオキなどが出現し，草本層にはオキナワキジノオ，カツモウイノデ，タカサゴシラタマ，マルヤマシュウカイドウ，セイトカスズムシソウ，アリモリソウ，オオヘツカシダ，クワズイモなど割にシダ植物の出現が多い。

湿潤な立地を好むので面積的にはそれ程広くはないが，西表島では低地部から山地の内陸部の深い谷間にも成林する。

アカギ群落
（西表島）



15 ハスノハギリ群集

(相観), 常緑広葉樹林の高木林から低木林。

ハスノハギリ群集は海岸林として浜堤上から, その後方にかけて成立する群落で, ハスノハギリを標徴種に持ち, テリハボク, アカギモドキを識別種とする群落である。

さらに, 立地の相違により3亜群集に下位区分される。即ち, 八重山諸島などの海浜側で最前縁に出現し, ハテルマギリ, シロダモ, ヤブラン, ホウライイケマによって識別されるハテルマギリ亜群集と, ヤエヤマアオキ, サキシマハマボウによって識別されるヤエヤマアオキ亜群集がある。さらにもう一つは前記の識別種を持たない典型亜群集である。

群落の構成種は高木層ではハスノハギリの優占度が高く, 其の他オオバギ, リュウキュウガキ, クロヨナ, クワノハエノキ, オオイワガネ, タブノキ, ミフクラギ, オオハマボウ, タイワンウオクサギ, オオバイヌビワなどが出現する。

亜高木層にはハスノハギリ, テリハボク, サキシマハマボウ, ハテルマギリ, シロダモ, リュウキュウガキ, コクテンギ, クロヨナ, ツゲモドキ, アカギ, ハブカズラ, シماغワ, シマトネリコ, モクタチバナ, オオハマボウ, ショウベンノキなどが見られる。

低木層ではモクタチバナ, アカテツ, シマヤマヒハツ, トウツルモドキ, オキナワキョウチクトウ, ヤエヤマアオキ, アカギモドキなどが, 草本層にはヤブラン, トウツルモドキ, アカテツ, コクテンギ, シマヤマヒハツ, テリハボク, ツゲモドキなど上層の稚樹の出現も多い。

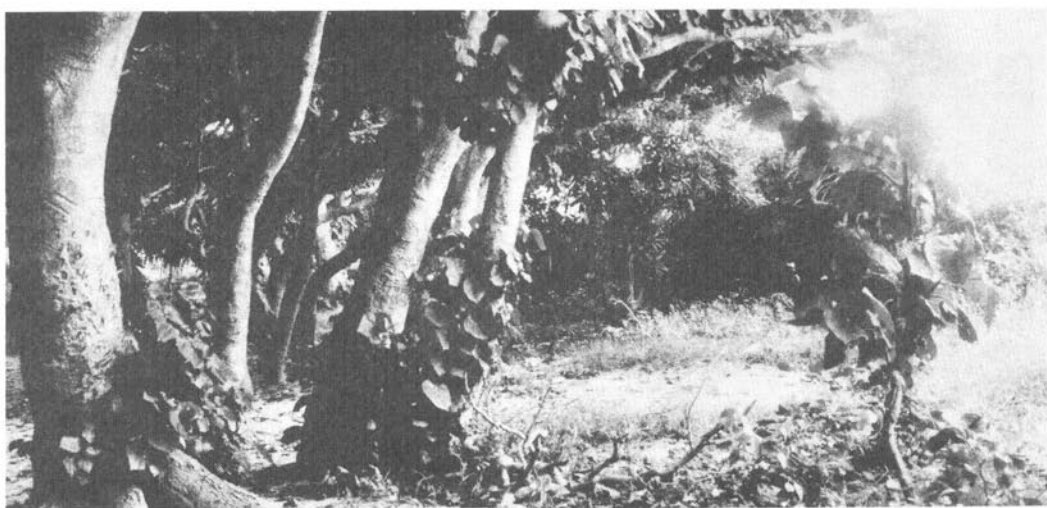
この群落の成林する立地が, 浜堤の為, 護岸工事などにより, 最近次第に少なくなっている。沖縄本島では僅かに名護市の宮里前の御嶽林として天然記念物として保護されているのが其の代表的な植分であり, 其の他安田部落の海岸林や久志部落の海岸の一部に見られるだけである。

宮古島では島の北端の狩俣御嶽の一部に, 発達した林分が見られる。多良間島も遠見近くの海岸林はこの群集と同質の群落と考えられる。

八重山諸島では各島々に海岸林として残されている所もあるが, 次第に其の面積は小さくなりつつある。防風, 防潮, 防砂林としての機能以外にも抱護林としての機能も理解し, 積極的に海岸林の育生には努力すべきである。



ハスノハギリの優
占する御願所林
(名護市)



ハスノハギリの優占する海岸林（石垣島明石海岸）

16 サガリバナサキシマスオウノキ群落

（相観），亜熱帯降雨林の高木林。

サガリバナ群落，サキシマスオウノキ群落はマングローブ林の内陸側の汽水性から淡水性の泥湿地に成立する群落である。

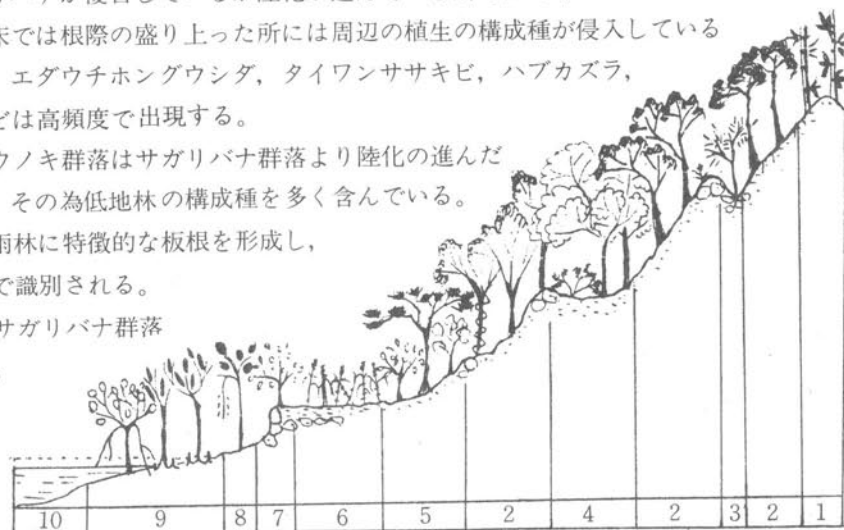
サガリバナ群落はサガリバナによって特徴づけられ，サキシマスオウノキ群落に接続する。群落の構造は高木層の発達がよく，亜高木層から草本層にかけて植被率が低い。

高木層はサガリバナが優占しているが陸化が進んでいる所ではカキバカンコノキが出現する。低木層以下の林床では根際の盛り上った所には周辺の植生の構成種が侵入しているがヌマダイコン，エダウチホングウシダ，タイワンササキビ，ハブカズラ，アリモリソウなどは高頻度で出現する。

サキシマスオウノキ群落はサガリバナ群落より陸化の進んだ立地に生育する。その為低地林の構成種を多く含んでいる。

一般に熱帯降雨林に特徴的な板根を形成し，その独特な樹形で識別される。

群落の面積はサガリバナ群落より広くはない。



仲間川流域植生配分模式図

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. リュウキュウチク-オオギミシダ群落 | 2. スタジ-ケナガエサカ群落 |
| 3. ホソバタブ-ヤマビワソウ群落 | 4. オキナワウラジログシ群落 |
| 5. 代償植生 | 6. 耕作地 |
| 7. 海岸林 | 8. サガリバナ群落 |
| 9. マングローブ林 | 10. 仲間川 |



板根を出すサキシマスオウノキ



サキシマスオウノキの板根

17 リュウキュウマツ群落

(相観), 亜熱帯常緑針葉樹林, 高木林, 亜高木林。

リュウキュウマツ群落は母岸に関係なく、沖縄県では低地から山地にかけて発達する。

リュウキュウマツは琉球列島固有の毬果植物であるが、植物社会としては先駆的な群落として位置づけられ、代償植生として見なされる場合が多い。その為群落の形態、構造、種組成は立地の相違や発達段階によりかなり差が見られる。さらに母岩の相違による出現種の差も大きい。



隆起サンゴ礁上の松林

18 シーカシ萌芽林

(相観), 常緑広葉樹林, 高木・亜高木林。

沖縄県内においてスダシイの萌芽林はきわめて多いが自然林との区別が容易でない。凡例では特に顕著なものだけを含めた。カシ型森林の萌芽林についてはオキナワウラジロガシやアマミアラカシの占有面積がきわめて小さく、また谷斜面に多く分布することなどから萌芽林を識別することは困難であった。

主要な構成種は亜高木層にスダシイ、アデク、カクレミノ、ヒメユズリハ、オキナワシャリンバイ、ヤブツバキ、リュウキュウチクなどが出現し、低木層にリュウキュウチクが優占し、シマカナメモチ、ヤブツバキ、ハクサンボク、タイミンタチバナ、ギーマ、カンコノキ等が出現する。草本層の植被は低く、多くは上層木の稚樹や実生である。県内各地に点在し、沖縄本島北部や石垣島の山地に多くみられる。

19 リュウキュウチク群落

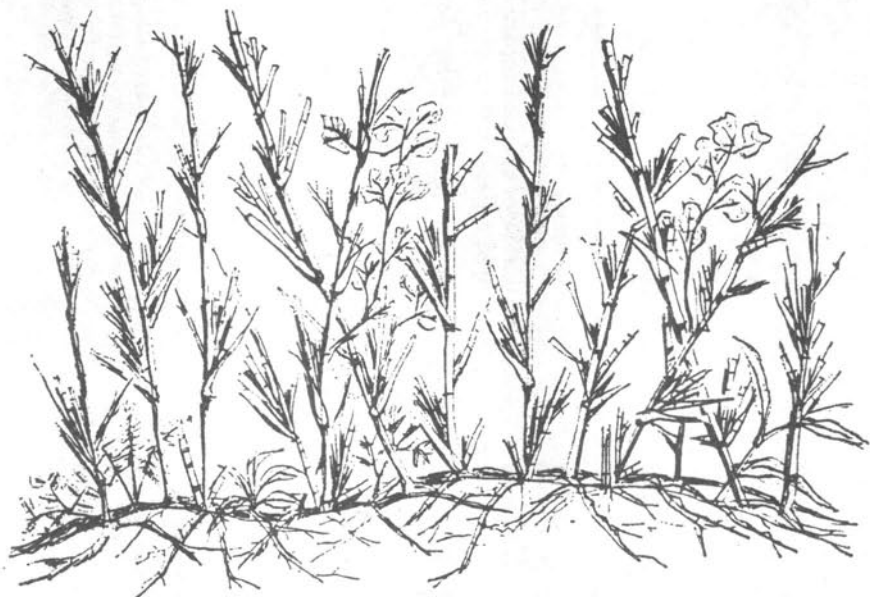
(相観), 竹林。

リュウキュウチク群落は低地から山頂まで風衝地であれば自然植生として出現し、野火や伐採などが繰り返され、土壌の生産力が弱まり瘦地化すると代償植生として出現する事もある。

西表島の古見岳や御座岳の山頂部や、北海岸に面した200 m 岳の絶壁の肩状部などに見られる群落は自然植生と考えられるが、沖縄本島の金武村、宜野座村の演習地内に見られる群落は代償植生と考えられる。

何れの場合も竹林として密生した構造を示す。

御座岳山頂部で調査した組成によれば、低木層ではリュウキュウチクの優占度が高く、その他ヤブツバキ、タブノキ、タイミンタチバナ、リュウキュウミヤマシキミなどが出現頻度が高い。草本層ではカクラン、コバノカナワラビ、ツユクサシユスラン、リュウキュウツルコウジ、トクサラン、ビシンジュズネノキ、タシロルリミノキ、アオノクマタケラン、エダウチチジミザサ、ヤエヤマノボタン、リュウキュウテイカカズラ、オオギミシダ、アカハダノキなどがよく出現している。



リュウキュウチク-オオギミシダ群落断面模式図



海崖の肩状部に発達したリュウキュウチク群落

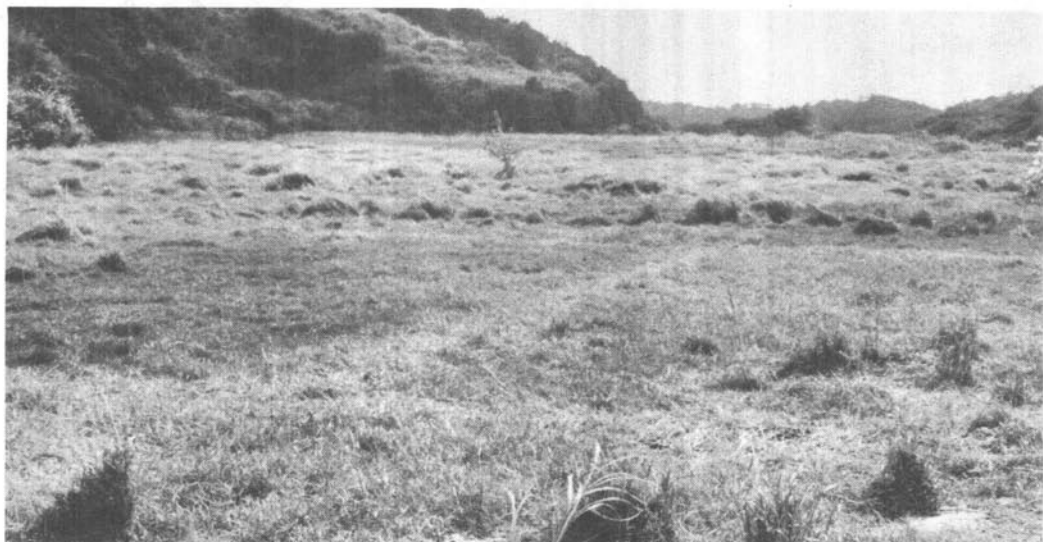


石垣島於茂登岳山頂部のリュウキュウチク群落

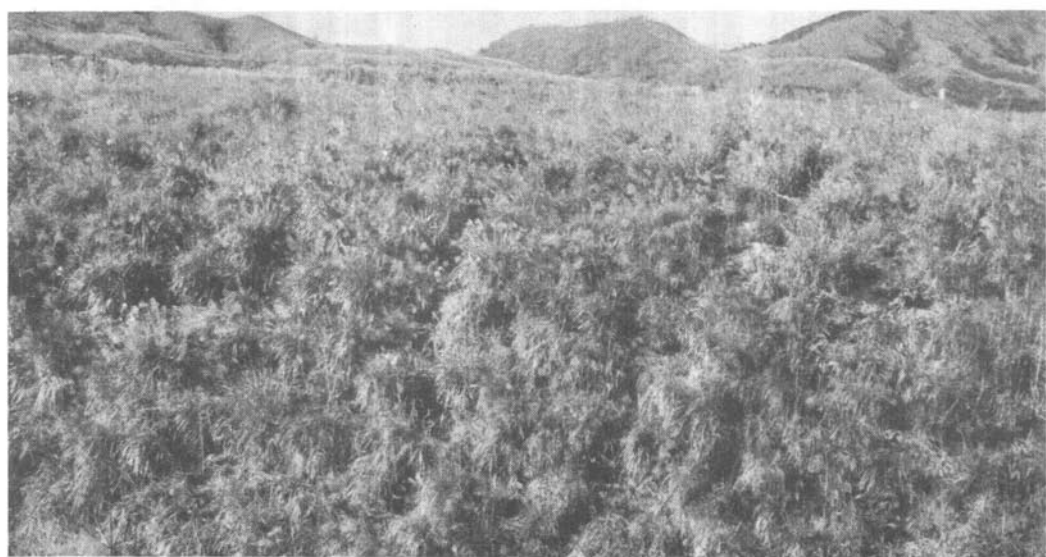
20 チガヤーススキ群落

(相観), 多年生草本群落。

ススキ草原は、毎年あるいは一年に何回か火入れ、採草によって維持される持続群落、もしくは放棄畑や造成地などに侵入して発達する遷移途上の植生である。上層には、ほとんどススキ一種によって占められ、時にノボタン、オキナワシャリンバイ、トベラなどが混在する。よく発達したススキ草原は高さが2～3 mに達し、植被率が100%を占める。そのようなススキ草原では構成種も少くなる傾向にある。ススキ草原の構成種はノボタン、コシダ、ムラサキカッコアザミ、ハマホラシノブ、ナガバカニクサ、ホシダ、ミズスギ、ワラビ、ウシノタケダグサ、ホシダなどである。



放棄畑に侵入したチガヤーススキ群落

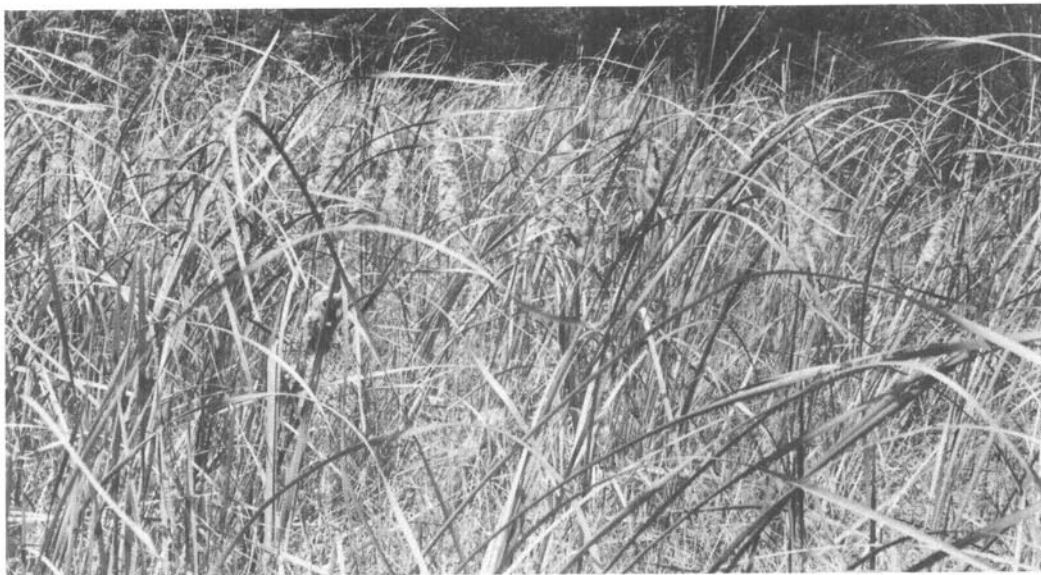


焼跡地のススキ群落 (沖縄島北部)

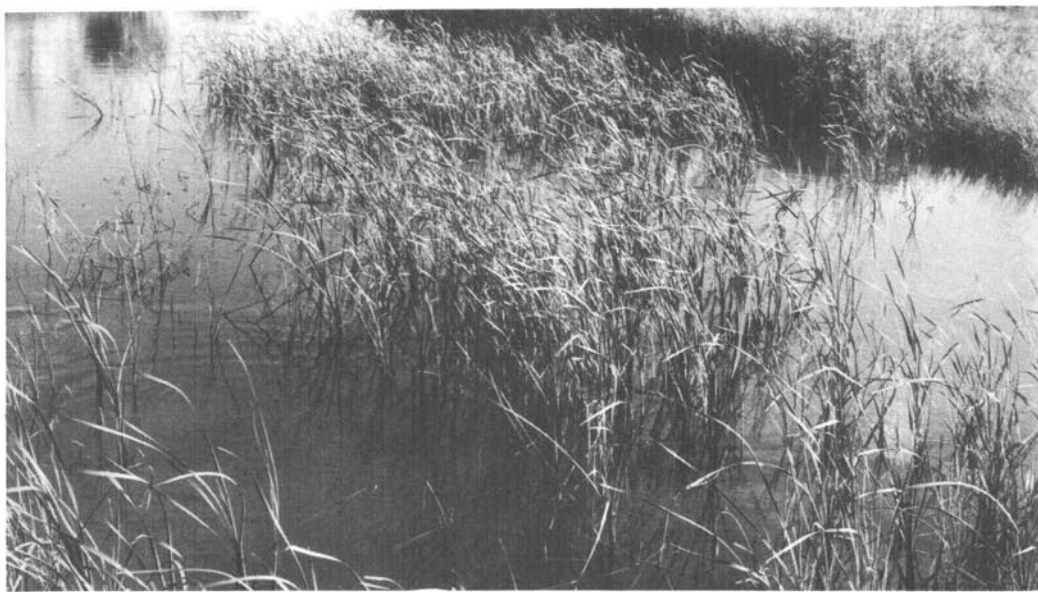
21 ヨシクラス

(相観), 挺水植物群落, 湿生植物群落。

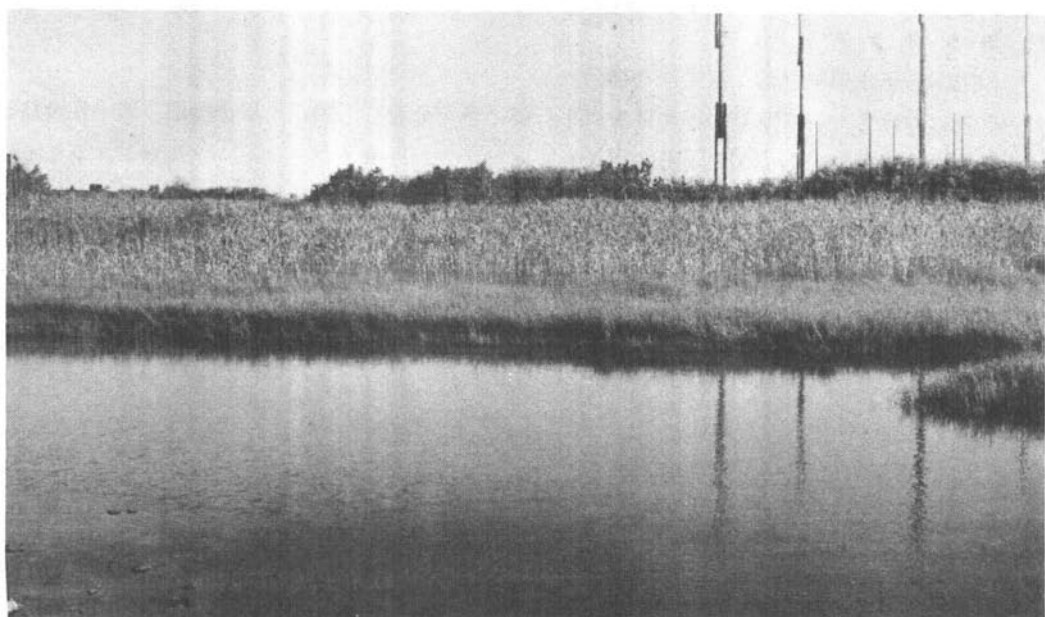
県内におけるヨシクラスの植生は海岸平野部に多く分布し、湖沼沿岸辺縁部、淡水性及び汽水性の湿地に群落を形成する。その主なものはヒメガマ、セイコノヨシ、ツルヨシ、シチトワイ、イヌクログワイ、カンガレイ、フトイなどが優占もしくは構成種となっている。



ヒメガマの群落



沼地に侵入してきたヒメガマ (沖縄島)



ツルヨシ群落（沖縄島）

22 ハマグルマーハマゴウ群集

（相観），海岸低木林。

ハマゴウの優占する低木林は海岸砂地のやや安定した立地に生育し，県内各地に広くみられる。構成種はハマグルマが出現する例は稀で，ハマウド，グンバイヒルガオ，ハルノノゲシ，シマアザミ，ハマササゲ，ハリツルマサキ，ソコベニヒルガオなどが普通にみられる。



ハマゴウの優占する群落

23 ゲンバイヒルガオークロイワザサ群落

(相観), 多年生草原。

本群落は一般に砂浜の不安定帯から半安定帯にかけて群落を形成している場合が多い。ゲンバイヒルガオが優占し、ハマニガナ、クロイワザサ、ハマゴウ、ツキイゲ、ソナレムグラ、ハイシバ、ハマヒルガオなどがみられる。県内の海岸のいたるところに分布する。



ゲンバイヒルガオの優占する群落

24 コウライシバ群落

(相観), 多年生草本群落。

コウライシバ群落は海岸風衝地に成立する植生で、岩礫地や土壌の浅い立地に多くみられる。本群落は沖縄本島北部の海岸や石垣島の海岸、とくに顕著なものは与那国島で海岸から放牧地にかけて広く発達している。



隆起サンゴ礁上のコウライシバソナレムグラ群落

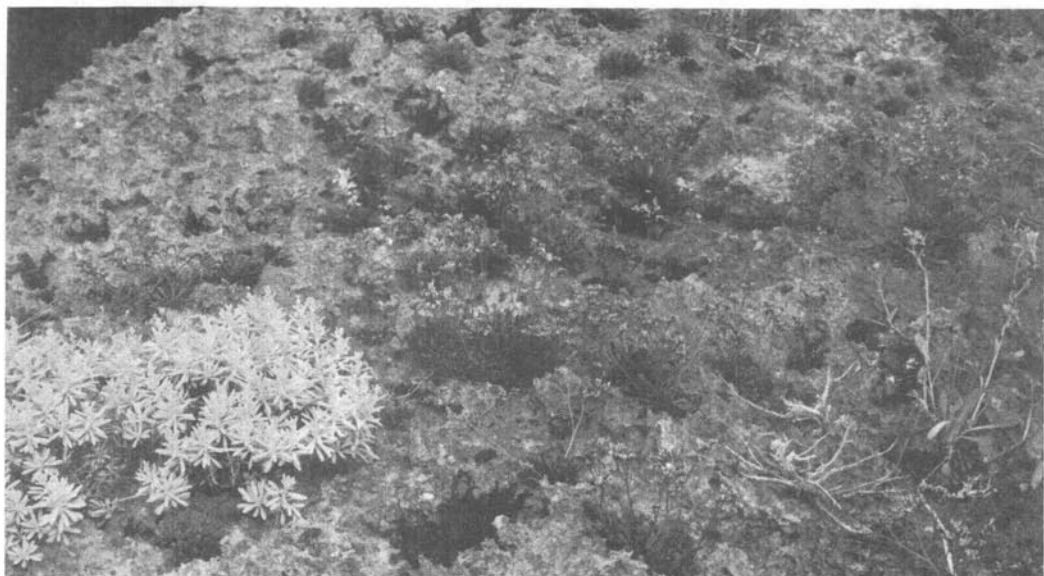


隆起サンゴ礁上のコウライシバ群落

25 隆起サンゴ礁植生（イソマツ－モクビャツコウ群集・クサトベラーモンパノキ群集）

（相観），草本状小低木林，灌木林。

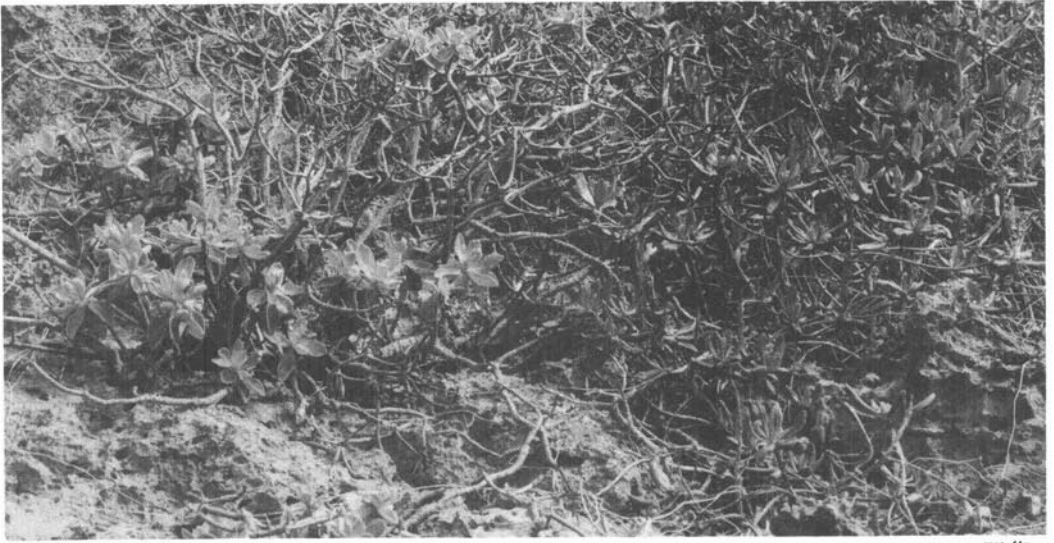
県内の海岸には隆起サンゴ礁石灰岩がよく発達し，その礁原上にイソマツ，モクビャッコウ，クサトベラ，モンパノキ，コウライシバなどの優占する草原もしくは灌木林がみられる。立地は土壌の発達はほとんどなく，岩礁の隙間に腐植質の土壌が見られるだけである。海からの飛沫を受け，耐塩性や耐乾性の強い植物が生育する。飛沫帯から内陸へかけて，イソフサギ群落，イソマツ－モクビャツコウ群集，コウライシバ－ソナレムグラ群落，クサトベラーモンパノキ群落などが分布する。



隆起サンゴ礁上のモクビャッコウとウコンイソマツ



隆起サンゴ礁上のミズガンピ群落

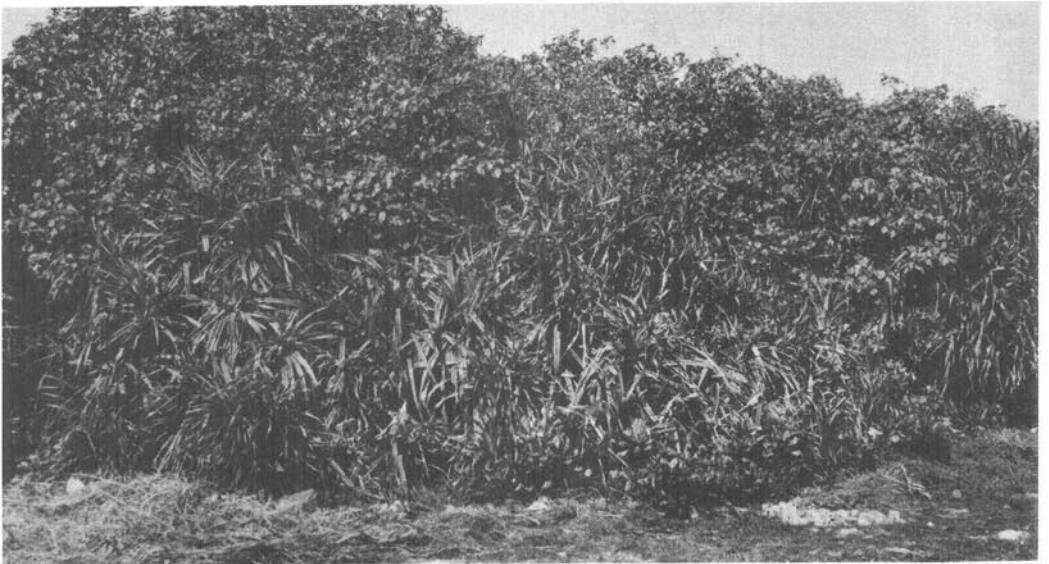


隆起サンゴ礁上のクサトベラーモンパノキ群集

26 アダンーオオハマボウ群落

(相観), 草本性木本形低木林, 常緑低木林。

アダン群落とオオハマボウ群落が含まれる。本群落は主として海岸の安定した砂地に群落を形成し、県内の海岸線に広く分布している。アダン群落の構成種はほとんどアダン一種のみでわずかにクロイワザサ、シマアザミ、クロミノオキナワスズメウリ等が下層に出現する。オオハマボウ群落の場合も上記と同じく構成種はきわめて少ない。アダンやオオハマボウの優占する群落は海岸砂丘のほかに河川沿いの砂質土壌、崖錐の砂礫地などにも広く生育し、また海岸近くの常緑広葉樹（ヤブニッケイ、タブノキなど）林の伐採跡地に侵入し二次的に群落を形成する場合も少なくない。



浜堤に発達したアダンーオオハマボウ群落



浜堤の前縁を形成するアダン群落



アダン群落の林内の構造

27 リュウキュウマツ植林

(相観), 亜熱帯性常緑針葉樹林, 亜高木林。

沖縄県内の植林の最も代表的なもので、常緑広葉樹林を伐採しその後にリュウキュウマツを植林している。植林後のススキが侵入し、ある一定期間はススキ草原の相観を示す。したがってそのような段階(リュウキュウマツが3 m以下)では一応草原とみなし、リュウキュウマツが第一層に優占する段階以後を植林とみなした。県内のリュウキュウマツ植林は下草刈がおこなわれずに自然放置され、自然二次林と人工二次林の区別がきわめて困難なものとなる。今回、明らかに植林されたと思われる箇所の荘令林までを植林としてリュウキュウマツ群落から区別した。群落構成種はリュウキュウマツ群落とほとんど変わらない。



植林されたリュウキュウマツの抱護林

28 外国産広葉樹植林・モクマオウ植林

(相観), 常緑樹林。

モクマオウ科の植物は本県では次の6種が栽培されている。オーストラリア産のカニングムモクマオウ、デプランシアモクマオウ、グラウカモクマオウ、ヒューゲルモクマオウ、シダレモクマオウ、マレーシア・ポリネシア産のトキワギョリュウ(モクマオウ)。そのうちモクマオウがもっとも広く用いられている。モクマオウは生長が速く、耐乾性に富み、海岸の防潮林や砂防用として各地に植林されている。



モクマオウの防風林

29 ソウシジュ植林

(相観), 常緑広葉樹林, 亜高木林。

ソウシジュはフィリッピン・台湾原産のマメ科植物で、緑肥や薪などの有用植物として、広く植栽されている。小規模ながら植栽地から逸出し各地に点在する。

30 ギンネム植林

(相観), 常緑低木林。

ギンネム(ギンゴウカン)は熱米産のマメ科植物で、本来緑肥植物として植栽されていたものが野生化し、県内各地に広がっている。ギンネム林は生育範囲が広く、適した空地があれば、かなり早い時期に侵入する。

とくに隆起サンゴ礁石灰岩や島尻層を基盤にもつ地域に広く発達し、耕作放棄地や道路沿いに多い。



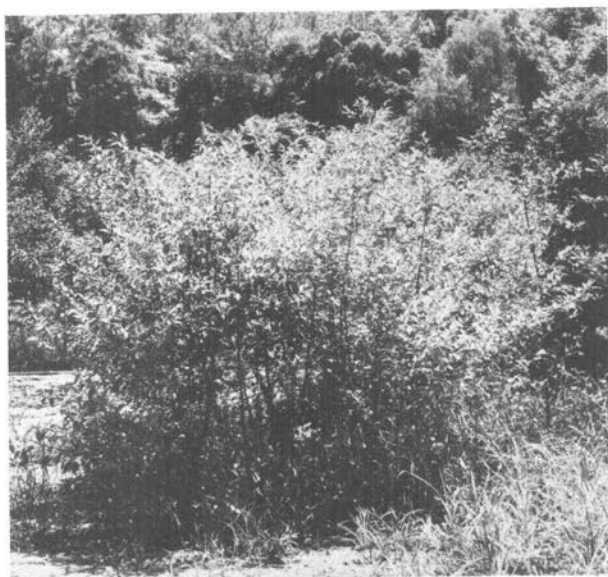
密生したギンネム

31 落葉広葉樹植林（ハンノキ植林）

（相観），落葉広葉樹林，高木林。

ハンノキ（タイワンハンノキ）は崩壊地の防止や砂防用として移入された植物であるが，植林地から逸出し各地に広がっている。

群落構成は高木層にハンノキ一種が優占し，亜高木層を欠き低木層にハンノキのみが出現する。草本層は草原構成種のススキ，エダウチチヂミザサ，ツルソバ，ナガバカニクサ，ハイキビ，タマシダ，キキョウラン，シマトユクサ，ホシダ，ムラサキカッコアザミ，ヤンバルツルマオなどが出現し，アカメガシワ，リュウキュウマツ，オオハマボウ，ゴンズイ，ギンネム等二次林要素の植物がみられる。



山崩れて埋まった河原に侵入したハンノキ

32 竹 林

（相観），竹林。

リュウキュウチク以外の竹林としてホウライチク，ホテイチク，マダケ，タイサンチクなどが見られるが，面積的に広いのはホウライチク林である。

ホウライチクは印度支那原産と考えられている竹であるが，沖縄県でも古くから屋敷林や生垣用，竹細工用，山林の境界用，崩壊防止用などに山間や里近くに栽培していた様である。

現在各地の山間に見られるのも，この様な竹の機能を活用するために植えられたものか，逸出したものであろう。そのため群落としてはホウライチクが優占しているのが特徴的で，その他は周辺の林分の構成種が出現する事になる。

しかし根茎が発達しているので，出現種はそれ程多いことはない。

33 常緑果樹園

県内の常緑果樹園は柑橘類の栽培が主体で，沖縄本島北部，石垣島，西表島などに多い。その他ごく小規模にバンレイシ，リュウガン，シャカトウ，キュウイーフルーツ，ジャワフトモモ，バンジロウ等熱帯性の果樹の栽培がみられる。

34 桑 園

(相観), 常緑低木林。

クワ畑は県内各地で小規模にみられる。クワ畑は沖積地や山腹の斜面に多く、その立地条件、管理方法によってクワ畑に出現する雑草群落には種々のものがある。

35 茶 畑

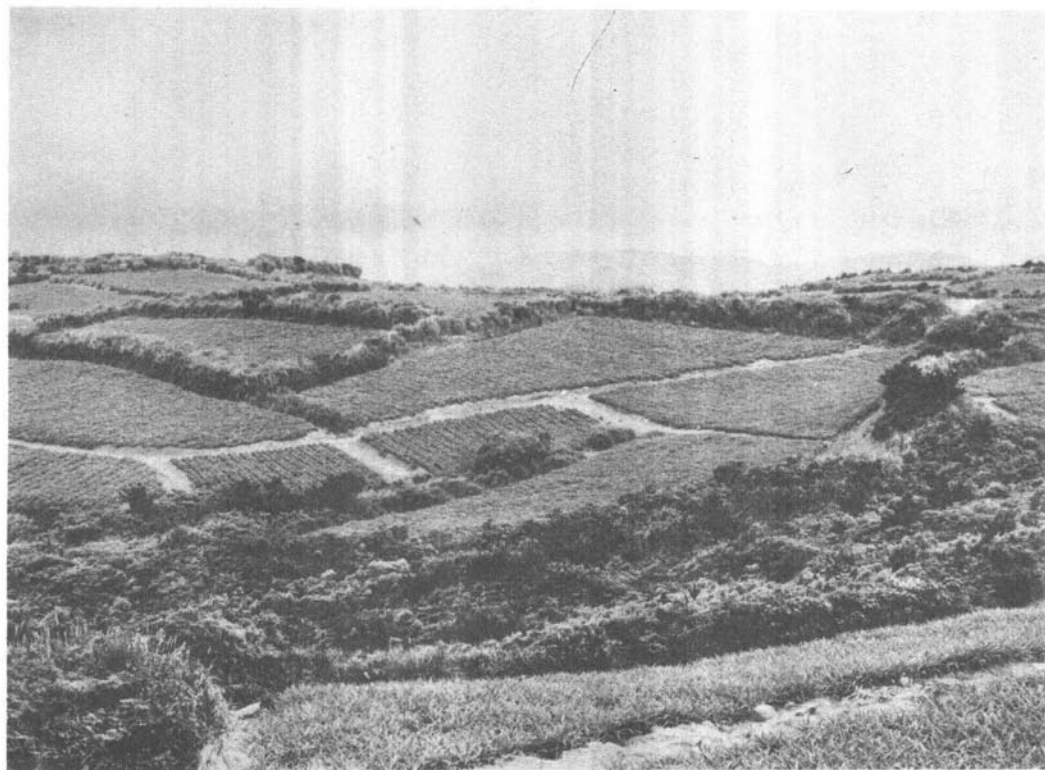
(相観), 常緑低木林。

茶畑は沖縄本島北部の山麓や山腹にあって、その規模はきわめて小さい。この茶畑は常緑広葉樹林を伐採して開墾したもので、本来はスダシイ林の成林する立地である。

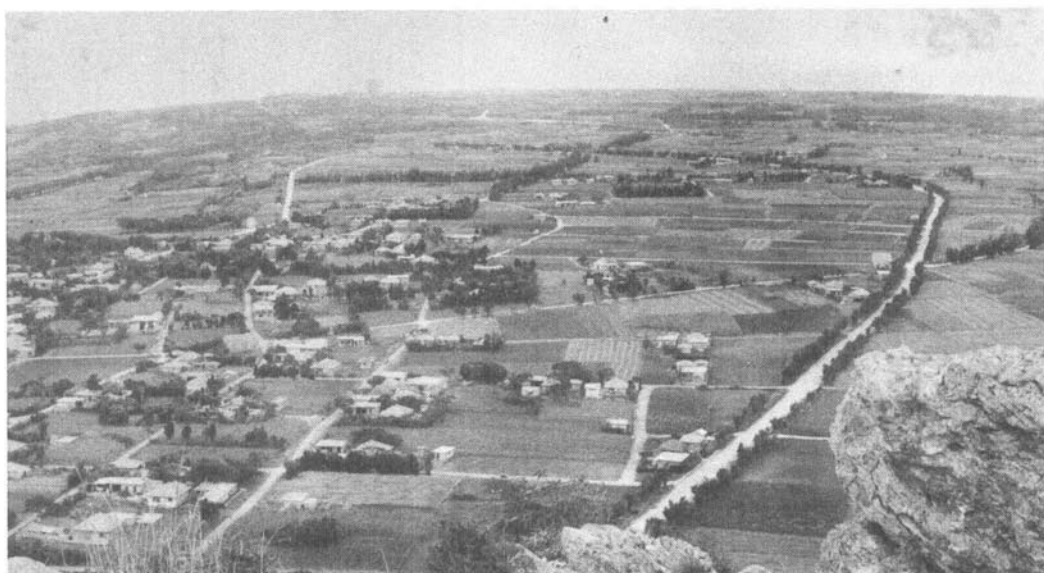
36 畑地雑草群落

(相観), 一年生草本群落。

県内の畑地雑草群落はイトアゼガヤ、オニタビラコ、ベニバナボロギク、カタバミ、エノコログサ、エノキグサ、アキメヒシバ、イヌビエ、ルリハコベ、ハマクワガタ、ウシノタケダグサ、オオエノコログサ、ハナイバナ、メヒシバ、ヤブジラミなどが出現する。本地域の畑地雑草はパイン畑とサトウキビ畑においても幾分組成が異なり季節的にも幾分変化が認められる。沖縄県内の畑地雑草群落はシロザクラス、ツクシメナモミ群団、ハマクワガタールリハコベ群集に属する。



開墾してできたパインアップル畑 (沖縄島東村)

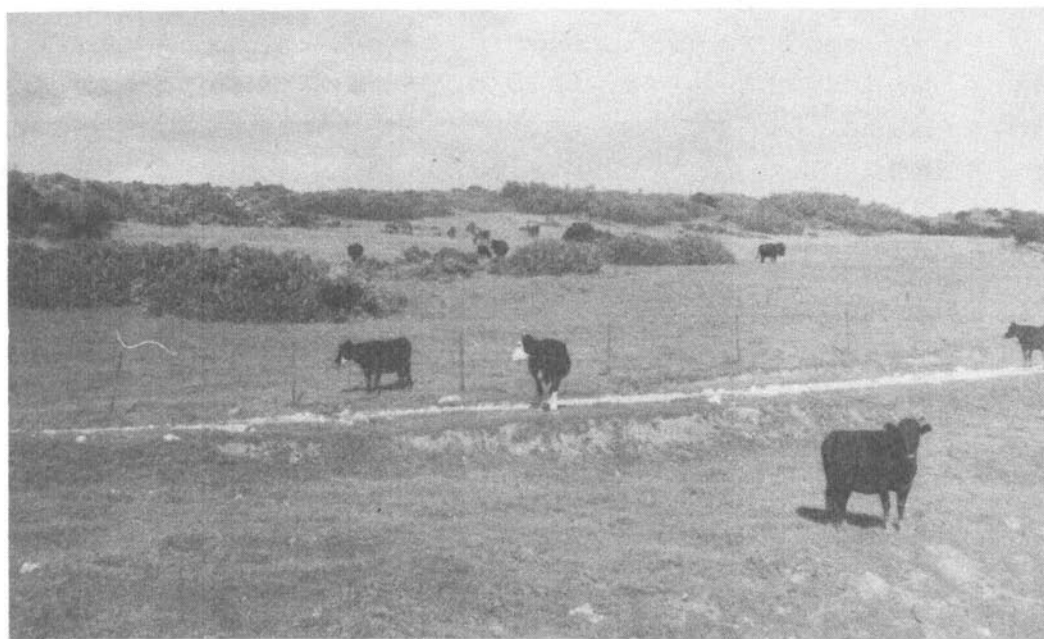


古くから耕作地として利用されている伊江島

37 牧草地・ゴルフ場

(相観), 多年生草本。

牧草地は沖縄本島北部の山腹、石垣島や西表島の山麓部から海岸低地部にかけて分布する。牧草地にはその立地条件によってコウライシバ群落、チガヤースズメノコビエ群落、オヒシバ・アイダクグ群落などが認められる。また牧場内には外来種のアフリカヒゲシバ（ローズグラス）やナピヤグラスなどが栽培されている。



与那国島の南牧場

38 水田雑草群落

(相観), 多年生草本。

沖縄県内の水田はほとんどが湿田であり, 湿田に特有な雑草で代表される。春の水田の調査結果ではナンゴクデンジソウが優占し, タガラシ, シマウリクサ, ハリイ, スズメノテッポウ, イヌビエ, ヒメタネツケバナ, タカサブrow, チゴザサ, クロタマガヤツリ, アゼムシロ, コナギなどが出現している。

近年, 水田は宅地造成や耕作作物の変更によって宅地やサトウキビ畑に変わり, その耕作面積は著しく減少している。

39 休耕田雑草群落

(相観), 多年生草本群落。

休耕田雑草群落には放棄後の時間的経過や立地条件によって種々の植生型がみられる。沖縄県内の水田は常に湿田の状態であり, 水田放棄や休耕田においても湿原と類似の相観を示している。普通にみられるのはチゴザサ群落でハイキビ, イヌクログアイ, スズメノコビなどが出現する。同様にヒメガマ群落, ハイキビ群落なども多くみられ, また帰化植物のパラグラスによって群落が形成される場合もある。

40 市 街 地

タチスズメノヒエ, オオアレチノギク, ホウキギク, アワユキセンダングサなどの帰化植物の他, ギョウギシバ, ハイキビなどが高頻度で出現する。

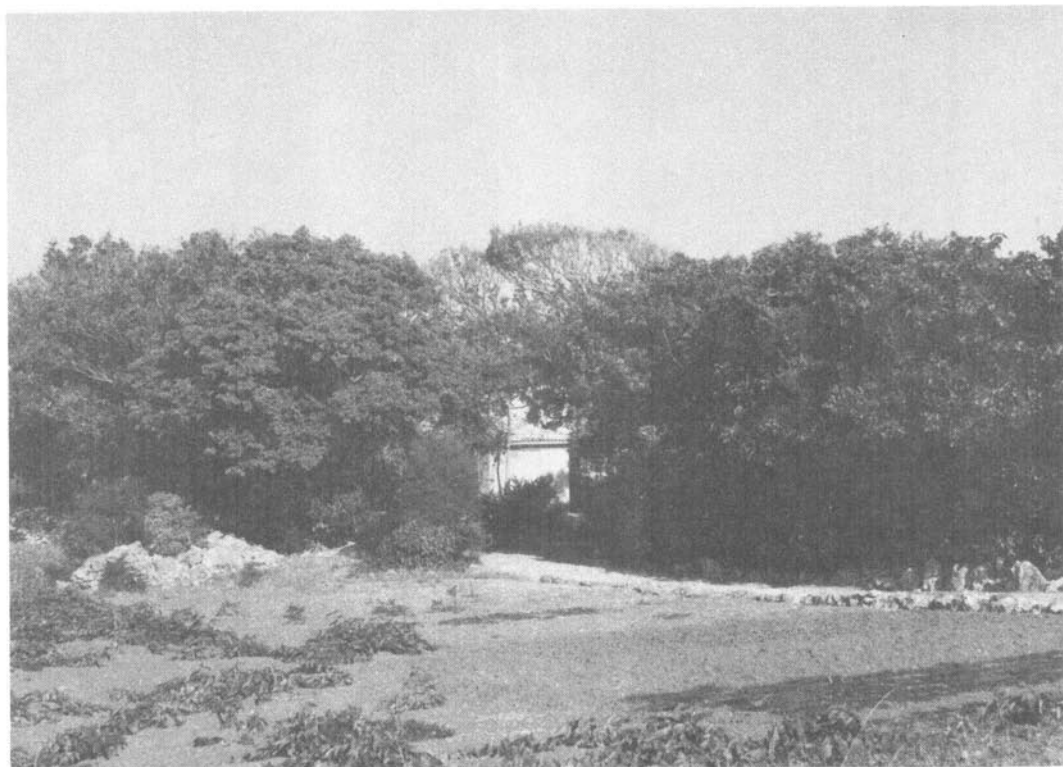
41 緑の多い住宅地・公園墓地

県内の古い集落には屋敷林に囲まれた住宅が多い。屋敷林は主としてフクギ, テリハボク, ブッソウゲ, イスノキ, アカテツ, オオハマボウ, アコウ, ガジュマルなどが植栽されている。これらの屋敷林は防潮, 防風林として, 季節風が強くなかつ台風の来襲の多い本地域においてきわめて有効な手段である。

近年道路整備や宅地の拡張などの都市化に伴って著しく減少している。



フクギの屋敷林



ガジュマル，クワノハエノキ，アコウなどの屋敷林

42 造成地・採石場

造成地は住宅や道路の建設，パインアップル，サトウキビ植付のための開墾地などが主である。

採石は沖縄県内各地で行なわれているが，特に本部半島の採石場が大規模である。

43 開放水域

県内における開放水域は主として灌漑用として建設された人工湖である。

44 自然裸地

Ⅵ 資 料 リ ス ト

番 号	筆 者 名	発 行 年	資 料 名
1	飯 泉 茂 編	1974	与那国島の草地生態に関する研究
	_____	1975	石垣島およびその周辺諸島の草地生態に関する研究
2			
3	宮 脇 昭 他	1971	逗子市の植生
4	新 納 義 馬	1963	島尻地方の植生の研究
5	_____	1972	西表島東部の植生
6	新 納 義 馬 他	1974	八重山群島の植生
7	_____	1974	沖縄島北部（国頭村）東海岸の植生
8	_____	1975	塩川周辺の植生
9	新 納 義 馬	1978	宜野座村内御願所林の植生
10	沖縄県教育委員会	1976	慶佐次湾のヒルギ林緊急調査報告
11	_____	1976	慶佐次湾のヒルギ林緊急調査報告Ⅱ
12	沖 縄 県	1978	特定植物群落調査報告書
13	財団法人・沖縄 国際海洋博覧会協会	1972	沖縄国際海洋博覧会会場予定地植生調査報告

Ⅶ 調査担当者名簿

番 号	氏 名	所 属	分 担 分 野
1	新 納 義 馬	琉球大学教育学部	総括責任者
2	宮 城 康 一	琉球大学理学部	調査並びに資料まとめ
3	大 神 一 宏	〃	〃
4	新 城 和 治	琉球大学教育学部	現地調査
5	新 田 宗 則	〃	現地調査並びに資料整理
6	加治屋 益 生	〃	資料整理
7	西 元 清 美	〃	〃
8	川 平 悦 子	〃	〃
9	平 林 久 美	〃	〃
10	林 田 英 樹	〃	〃
11	与世田 京 子	〃	〃

